

ACE

Act and Communicate in English

特集

外国語学習における 児童のつまずきに対する支援

Tips for Activities!

クラスのはたを作ろう♪

COLUMN

異文化理解から、文化的調和の理解へ①

外国語学習における 児童のつまずきに対する支援

1. はじめに

2020 年度から中学年に外国語活動が導入され、高学年の外国語科では読むこと、書くことの学習にも取り組むことになりました。新しい学習指導要領の全面実施から 4 年が経過し、指導に慣れてきたと感じている先生もいらっしゃるでしょうし、一方で児童の学習の課題が顕在化し、対応に苦慮している場合もあるのではないのでしょうか。小学校で英語学習が始まる以前より、英語を難しい、不得意だ、嫌いだ、と感じている学習者が多いことは教育分野でも社会的にも話題になっていました。そもそも、なぜ英語を難しいと感じる学習者が多いのでしょうか。私たち指導者には何ができるのでしょうか。本稿では、英語学習における学習者のつまずきと、その支援方法について考えていきます。

2. 母語の影響

日本語と英語は、言語として異なる点が多くあります。アメリカ国防総省の外国語センター (DLIFLC) では、英語母語話者にとっての学習の難しさ度合いによって外国語を 4 つのカテゴリーに分けていますが、日本語は最も難しく、習得に長い時間がかかる言語カテゴリーに属しています。発音、文法、文字や表記システム等、多様な側面で日本語と英語には違いがあり、その違いを乗り越えていくための丁寧な指導が求められます。

①発音

「英語には日本語にない音がある」「日本語の『ラ行』では l と r を区別しないので、日本人には難しい」といった話を聞かれることは多いでしょう。実際、英語の方が日本語より子音も母音も種類が多いため、日本語を母語とする学習者にとっては、聞いたことのない音の聞き分けや、口にしたことのない音の発音をしなくてはいけないことになります。それは当然難しいことなので、単語の発音練習などでも、正しく聞き取れないまま、近い日本語の発音に置き換えてリピートしている児童も多いと予想されます。このことは、放置していると後々の学習に大きな影響を及ぼします。例えば、「ラブ」というカタカナを英単語として書こう（あるいは発音しよう）としたとき、どのような綴り（発音）になりますか。日常出会う頻度が高いので、love と考えた人も多いかもしれませんが、しかし、この答えは「ラブというカタカナだけではわからない」が正解となります。「ラ」は l と r の可能性があります。「ラ」の中の「ア」は /æ/ と発音する可能性もあれば /ʌ/ と発音する可能性もあります。そして「ブ」は b と v の可能性があるわけです。そのため、love (愛 /lʌv/)、rub (こする /rʌb/)、lab (実験室 /læb/) のどれになるのか、「ラブ」というカタカナからだけではわからないの

です。中学校、高等学校と学習が進んだときに、カタカナやなんとなく近い日本語の発音に頼っていると、正しく発音できないだけでなく、正しく綴ることも困難となり、多くの苦労を経験することになってしまいます。

児童の発音がいわゆる日本語発音になっているときや、誤っているとき、それを指摘するのは心苦しいと思われるかもしれませんが、発音は正解がはっきり見え、児童も合っているのか、合っていないのか、不安を感じやすいので、そこを厳しく指摘することで児童の自信や学習意欲を削いでしまうことは避けたいと思われる先生も多いと思います。しかし、正しい発音を知っていることは、将来単語を綴り、文を書く段階になったときに、必ず役立つ力になります。授業中には発音をリピートさせる場面が多くあると思いますが、単に聞いて言わせるだけでなく、入門期では「正しい英語発音」と「日本語発音」を聞かせてどっちが正解かをクイズにして問うなど、発音への意識を高めるような学習をするとよいでしょう。高学年になると、文字がもつ音を取り上げたジングルやチャンツを通して、より具体的に英語の音に触れる機会が増えると思います。そのときにも、情性で口ずさむのではなく、よく聞く、正しく真似する、という意識をもって取り組み、そこで得た知識を単元内の語句の発音の際にも活用するよう声かけをすると、児童の発音への意識も高まると考えます。



令和 6 年度版 CROWN Jr. My Dictionary ABC Chant

また、英単語を構成している一つひとつの音（専門的には音素といいます。cat の中には /k/ /æ/ /t/ の 3 つの音素が含まれます）を正しく発音できるだけでなく、英語の音のかたまりに対する意識を高めることも、聞き取りを容易にし、また聞き取ってもらいやすい発音ができるようになるために重要です。例えば、低学年児童の多くは日本語で「えんぴつ」と聞けば、「え・ん・ぴ・つ」の 4 つの音が入っていることがわかります。このように聞こえた単語をより小さな音のかたまりに分解する力もまた、聞き取る力、発音、書く力につながります。英語では、単語は「音節」という単位に分解することができ、これが日本

クラスには外国語が得意な児童もいれば、苦手な児童もいるでしょう。外国語学習につまずいている児童に適切な支援ができれば、苦手意識も軽減できるかもしれません。児童はどういうところにつまずいてしまうのか、そのつまずきに対してどう支援をしていったらよいのか、広島大学の松宮奈賀子先生にお聞きしました。

語の「拍」の感覚に似たものになります。私たちが人の名前を思い出せないとき、「なんとなく3文字(3拍)だった気がする。4文字ではないと思う(「やまだ」か「たなか」か思い出せないけど、「きのした」とか「こんどう」とかではない気がする…)」という感覚をもつことがあります。英語話者にとっては音節がこのような感覚に相当します。それでは January から December までの月の言い方はそれぞれ何音節(いくつ音のかたまりが入っている)でしょうか。ざっくり言うと、ひとつの音節にはひとつの母音の音が含まれます。January は Jan·u·ar·y の4音節になります(最後の y は母音の音を出しているので音節を形成します)。しかし、児童には、このようなルール説明で理解するよりも、体験的な学び方のほうが適切といえるでしょう。そこで歌やチャンツを活用します。歌やチャンツは何回か聞いたら「一緒に歌ってみよう」という流れで扱うことが多いと思いますが、音節構造に気づくには、歌うよりもハミングをしてみるの方がわかりやすいことが多いです。例えば *12 Months of the Year* (YouTube の The Learning Station チャンネルより) を聞こえたとおりにハミングしてみてください。ハミングで「フン・フン・フン・フン」と言った数が音節の数です。そして「フン・フン・フン・フン」は同じテンポではなく「フン・フ・フ・フ」のようにアクセントのあるところが強く、長めに発音されていて、残りは素早く発音されていることにも気づくと思います。ハミングや手拍子をしてしながら発音することで、細かい説明抜きで音節の感覚を養うことができるので、小学校ではこのような体験を楽しみながら重ねてほしいと思います。

音節の感覚がわかってくると、たとえば textbook と tiger は綴りの長さ(文字数)が違って、同じ「●●」のリズムで発音されることが体感的に分かるようになり、このリズムで発音することに慣れることで、聞き取りも容易になっていきます。日本語の拍の感覚で「テ・キ・ス・ト・ブ・ッ・ク」「タ・イ・ガ・ー」と区切って発音すると、英語の音のかたまりの単位と合っていないので、聞き取ってもらいにくくなり、また英語を聞き取る際にも、自分の頭の中で「テ・キ・ス・ト・ブ・ッ・ク」と思っていると「●●」のリズムで発音されることが想定できず聞き取れない、ということにつながります。実際、英語の聞き取りが苦手な大学生に話を聞くと、自分の頭の中で本来の発音とは異なる発音(カタカナ発音など)で語を覚えていたために、学習済みのはずの単語が聞き取れないことがあった、という声がありました。

小学校の英語の授業の中で、なんとなく楽しいから歌やチャンツを扱うのではなく、意図をもちながら指導することで、児

童にとっては発音の難しさ、聞くことや書くことの難しさを緩和することにつながる学びとなるでしょう。

②書くこと

書くことは高学年外国語科で新しく始まった内容で、主には見本を見ながら書き写すことができることを目指しています。日本語はアルファベットを使用しないので(ローマ字を除く)、文字の形、名称、音のすべてを新たなものとして学習しなくてはならず、文の中のほとんどを占める小文字においては、四線上の位置取りも習得する必要があります。また、語と語の間には一定のスペースを取って分かち書きをすること、1単語は適切に詰めて書くことも学ばなくてはなりません。自分の名前の頭文字に入っている文字を、英文中でも常に大文字で書いてしまう(例えば、私の名前は Nagako なので、ワークシートにいつも Nagako と書いていると、N を大文字で書く癖がついてしまい、I doN't like teNNis. と書く)など、個別の声かけが必要な場合もあると思われます。下記の例のように、文頭が大文字になっていない、綴りにミスがあるなど、見本をしっかりと見るように声をかけることで対処できることもあると思いますし、書く場所から近いところに見本を置くように支援することで難しさが和らぐこともあると思います。

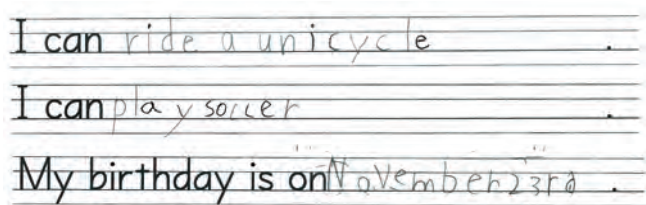
児童の書字の例①

このような基礎的な書字の指導に加えて、もうひとつ重要な点があります。それは、児童が「どのように書いたか」という点です。これは児童の作品を見ているだけでは見えにくいものでもあります。例えば、下記の文を書き写してみてください。

تُكتب اللغة العربية بدءاً من اليمين.

アラビア語を学習したことがない人にとっては、何と書いてあるかも、発音も書き順もちんぷんかんぷんで、図形を書き写すだけの作業になってしまうでしょう(ちなみにアラビア語で「アラビア語は右から書き始めます。」と書かれています。自動翻訳 by DeepL, <https://www.deepl.com/ja/translator>)。通常、書き写す際には頭の中で文字を音声化しながら、適切なかたまりで書いていきます。「わたしはきのうとしょかんへいきました。」という文を書き写すときに「わた・しはき・のうと・しょかんへい・きました。」と区切りながら書くことは、日本語が身につけている母語話者であれば考えにくいことです。しかし児童の中には、「ただ書き写している」児童もいると思わ

れます。その理由は、音声で十分に語句や表現に慣れていないこと、自分が書いている文がどのように発音されるのかを意識しながら書いていないことなどが考えられます。聞く・話す活動を通して音声に慣れ親しんだところから、一足飛びに「書いてみよう」に進むのではなく、その途中に文字を見て語の区切れ目を意識しながら発音する段階を設けたり、「頭の中で発音しながら書こう」といった声かけをしたりするなど、「ただ漫然と書き写せばよい」という思考にならないための工夫が大切になります。1 単語の途中で不自然なスペースがある場合などは、音を意識しながら書くことができていない可能性が考えられるため、書く活動中に書いている様子を注意して観察するなどの支援が必要かもしれません。また、長い単語など、一度に綴りを書くことが難しい場合がありますが、そのときの大まかな区切れ目は音節の区切れ目になります。音節の分け方は細かいルールがあるため厳密に正確さを求めるのは難しいですが、September であれば、発音をしてみて Sep·tem·ber に分けながら書くなど、いくつか例を出して書き写す練習をしてから自分の書きたい内容の文を書くといった段階を踏んだ指導も、音声と書くことをつなげる意識をもつことにつながっていくと思います。



児童の書字の例②

分かち書きが難しい場合には「スペーサー」と呼ばれる道具を活用することもひとつの支援策になります。またこの道具を手元に持つことだけでも「分かち書きをしなくてはいけない」という意識づけにつながると思います。

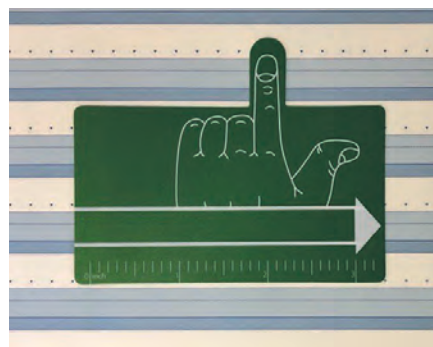


写真
スペーサーと四線ノート

上記写真のスペーサーは市販のものですが、finger spacer と打ち込んで検索すると、ダウンロードして印刷可能なものも見つかると思います。少し厚めの用紙に印刷して配ってもよいですし、あるいは算数の数え棒や、モール、ストローなど安全に配慮して活用できるものはいろいろあると思いますので、ぜひ工夫してみてください（写真の四線ノートの出典は後述）。

3. 学習形態

ここまで日本語と英語の違いに起因し、十分な指導の配慮や工夫がないと児童の「できない」につながりがちな点について

論じてきました。次に、小学校でよく行われている、しかし、もしかしたら児童の苦手意識を高めているかもしれない学習のあり方について述べたいと思います。

外国語活動では、聞くこと、話すこと〔やり取り〕、話すこと〔発表〕の3領域を扱います。高学年では読むこと、書くことを加えた5領域になりますが、やはり学習の中心は音声での学びになります。必然的にどの単元でも、児童同士のペアでのやり取りの活動は多用されていることと思います。実際に、自由に教室を歩いて相手を見つけては対話をして、多くの人とやり取りをするという活動をよく目にします。この活動をする、ペアの相手を見つけることが難しい児童が、どの学級にも数名はいるのではないのでしょうか。そのような児童にとっては、大きな苦痛を強いられる活動になっているかもしれません。そして、そのような児童はクラスの数%に見えるかもしれませんが、実はより多くの児童がこの活動に苦手意識を抱いているかもしれません。

私たちの研究グループが、大学生に小・中学校時代を思い出して回答してもらったアンケート調査（回答者 1,393 名）で、回答者の約半数（49%）が「対話場面でペアを作ることが苦手だった」と回答していました。自由記述でも「特定のひとしかペアを作れず、時間内に複数回ペアを作るスタイルの場合、時間が余ってぼーっとしていた」といった声も聞かれました。もし、相手を見つけて話すことが難しい児童がいる場合、それでもこの「自由に相手を見つける」ことの意義は何か、メリットとデメリットを一度考えてみていただくとよいと思います。メリットとしては、自分でペアの相手を見つけるという主体性や、仲のよい友達と話す楽しさ、といった点が挙げられるかもしれません。また、限られた時間で活動するため、近くにいる人とランダムにペアを組むことになり、結果的に普段あまり話さない人とも話す機会を作ることになるかもしれません。一方で、ペアが見つからない場合は、英語を聞き、話す時間を有効に使うという点において無駄が多い活動になってしまっているかもしれません。また、教室中がうるさくなりがちで、騒音の中で学ぶことが得意でない児童が苦手意識をもつ活動になっているかもしれません。こういった児童の情意面、学習面でのメリットとデメリットを検討して、座っている席をひとつずつずらして交代するのと、タイミングを決めて自由にペア交代をするのとどちらがよいかなど、楽しさと安心感のバランスを考えて、活動の形態を決めていくとよいでしょう。

4. 個別のニーズ

最後に、学習者全員には当てはまらないものの、学習者個別の特性によって、英語学習に難しさを覚える場合について考えていきます。

学級には多様な子どもたちがいます。通常の学級に在籍する児童生徒の中には、特別な教育的支援を必要とする子どもたちもいます。平成24年度と令和4年度に文部科学省が実施した調査では、p. 5 の表1、表2の結果が得られています。

児童の特性は多様であり、まずはその実態やニーズの把握が

表 1 学級担任等が回答した内容から、「学習面又は行動面で著しい困難を示す」とされた児童生徒数の割合（小学校・中学校）

	R4	H24
学習面又は行動面で著しい困難を示す	8.8%	6.5%
学習面で著しい困難を示す	6.5%	4.5%
行動面で著しい困難を示す	4.7%	3.6%
学習面と行動面ともに著しい困難を示す	2.3%	1.6%

表 2 学級担任等が回答した内容から、「学習面、行動面の各領域で著しい困難を示す」とされた児童生徒数の割合（小学校・中学校）

	R4	H24
「聞く」又は「話す」に著しい困難を示す	2.5%	1.7%
「読む」又は「書く」に著しい困難を示す	3.5%	2.4%
「計算する」又は「推論する」に著しい困難を示す	3.4%	2.3%
「不注意」の問題を著しく示す	3.6%	2.7%
「多動性－衝動性」の問題を著しく示す	1.6%	1.4%
「対人関係やこだわり等」の問題を著しく示す	1.7%	1.1%

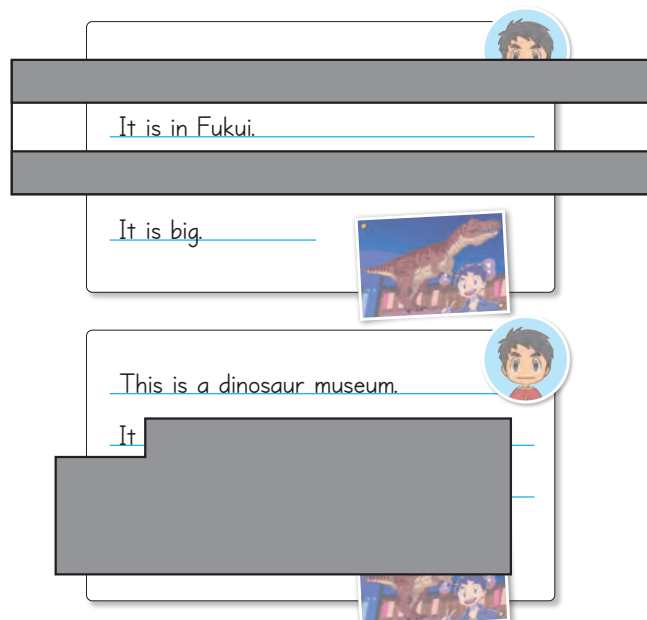
※ 調査対象地域や一部質問項目等が異なるため、単純比較することはできないことに留意する必要がある。

必要になります。そのうえで、個別の支援を要する児童へのニーズが学級全体にとっても有効である場合には、全体への支援として提供することを考えるとよいでしょう。例えば、先述の分かち書きをするときに使える「スペーサー」などは、分かち書きができない児童だけでなく全員に配付して、単語ごとにスペーサーを当てながら書いたり、一文を書き終わってから確認のために活用したり、児童が適切に活用できるよう使い方のアドバイスをするとよいでしょう。

日本語の読み書きに困難がある場合、英語でも同様の困難を経験する可能性が考えられます。すらすら音読できない、といった事象が起きている場合でも、その背景は個々に異なることが考えられます。例えば次の行に移る際の目線移動がスムーズにできない児童に対しては、見るべきところを焦点化するための「読書ガイド（リーディングトラッカー）」を活用してみるとよいと思います。また、1単語ずつ読み進めたいときには、1単語進むごとにすらしながら、今読んでいる単語に視線が行きやすくなるようなガイドを活用することが効果的と考えられ、こちらをもまた全員に提供できるものになります。

また、四線をうまく認識しづらい場合には、色づけがされた四線を活用することもできます。p. 4 の四線ノートは、学習につまずきがちな子どもたちへの支援として、NPO 法人リヴォルヴ学校教育研究所が開発したものです。市販のものを利用する以外にも、児童自身で基線（下から2番目の線）をマーカーでなぞって、基線を濃く、見えやすくすることもできるでしょう。そうすることで、基線が強調されるだけでなく、児童が基線を意識することにもつながります。

音声だけで長い単語や文を覚えることが難しい児童には、ヒントとなるイラストや文字の書かれたプリントを用意するなどに対応も考えられます。一方で、話す内容をすべて板書やプリントで示すと、その通りに話さなくてはならないというプレッシャーで逆にうまく話せなくなる児童もいるかもしれません。提供した支援を使うか、使わないかを児童自身が選択していけるように指導していくことが重要になります。



上：行ごとの目線移動を助ける読書ガイド 下：1語ごとの目線移動を助ける読書ガイド（紙面はCROWN Jr. 5 p. 90より転載）

視覚から情報をとることが得意な学習者もいれば、聴覚から情報をとることが得意な学習者もいます。体を動かしながらの方が覚えやすい、メロディーがある方がよい等、子どもたちのニーズは多様です。一人ひとりに合った、異なる支援を提供できればよいかもしれませんが、時間的にも環境的にもそれが叶わないことも多いでしょう。大事なことは、児童自身が「こっちの方がやりやすい」ということに気づけるチャンスを提供するために、同じ目的をもった学習でも多様な学び方や資料を用意してみて、児童が自分で取捨選択できるように「学び方を学ぶ」機会を提供していくことです。

児童のつまずきは、教え方、学び方を考える貴重な声です。指導者が英語という言葉の仕組みをさらに理解することと、目の前の児童の声をよく聞くことが、つまずき支援への道と考えます。

【参考 URL】

- Defense Language Institute Foreign Language Center (DLIFLC). (n.d.). Languages Offered. <https://www.dliflc.edu/about/languages-at-dliflc/>
- The Learning Station - Kids Songs and Nursery Rhymes. (2014, Aug 13). Months of the Year Song - 12 Months of the Year - Kids Songs by The Learning Station [Video]. YouTube. <https://www.youtube.com/watch?v=IPeAo1hz8GA>
- 初等中等教育局特別支援教育課（2022）. 「通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果について」. 文部科学省. https://www.mext.go.jp/content/20230524-mext-tokubetu01-000026255_01.pdf
- 初等中等教育局特別支援教育課（2012）. 「通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果について」. 文部科学省. https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/material/_icsFiles/afieldfile/2012/12/10/1328729_01.pdf



松宮奈賀子（まつみや・ながこ）

広島大学大学院人間社会科学研究科准教授。小学校英語教育学会理事、初等教育カリキュラム学会理事。

Tips for Activities!

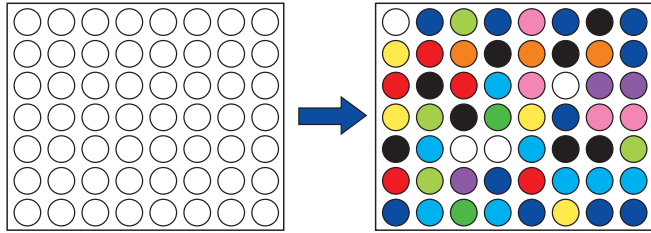
やってみよう
英語活動

言語活動は大切ですが、あまり難しく考えすぎないで、なるべく簡単な目的・場面・状況を考えてものにしていけば、気軽に活動に取り組むことができますね。そのような活動をご紹介します。

「クラスのはたを作ろう♪」 (3年生)

使用するもの

●パソコン (Word など) または、画用紙／紙



※人数分×2 + 1 の○を用意する (+ 1 は教師の例示用)。

※人数分 + 1 でもよい。

※○以外の形でもよい。

●色鉛筆、マーカー、クレヨンなど

手順

1. クラスの旗作りをすることを理解する。

色を塗っていない旗を見せながら、“Let’s make a 3-2 flag.” と言って、旗作りをすることを伝える。

国旗などを使って、旗を示すことで、日本語の説明がなくても理解できるようにする。

2. 色塗りをしていく。(意味と音を結びつける段階)

T : I like yellow. What color do you like?

C : 赤。

T : Oh, you like red. I like yellow.

このやり取りをしながら、児童の言った「好きな色」を使って、○を塗りつぶしていく。このとき、児童は日本語で答えてもよいこととする。教師が児童の言いたかったことを you を使って英語で聞かせ、さらに教師自身のことについて再度言うことで、児童は自分のことを言うときの英語表現をインプットすることができ、I と you を無意識のうちに聞き分けることができるようになる。

児童の反応によって、教師の返しの意味合いは変わる。児童が “Red.” だけで答えた場合には、教師の返しは、自分のことを言うときの表現のインプットとなる。児童が “I like red.” と答えられている場合には、教師の返しは、言った本人にというよりも、周りの児童に聞かせるためのものとなる (省いてもよい)。

3. 教師と一緒に言ってみる。(英語を口に出してみる段階)

T : 自分が言ったものと同じものを口に出してみよう。

I like red.

Cs : I like red. (当てはまる児童だけリピートする)

※これを繰り返して、口に出して言う練習をする。

4. 残った○に色をつけていく。(実際に使う段階)

※このために、人数×2 の○を用意した。

T : まだ○が残っているから、色をつけていこう。

What color do you like?

C : I like red.

※最後に、周りの□の部分の部分が白のままなので、時間や児童の気持ちに余裕があれば、「先生に聞いてくれる人？」と投げかけ、児童が教師に “What color do you like?” と質問をする機会をつくることもできる。

Teacher Talk

What color do you like?

I like yellow.

この授業において児童に聞かせたい、また、今後児童の口から出てきてほしい英語表現なので、教師自身のことについても “I like” を使って表現 (自己開示) できるようにしておきたい。教師からの投げかけは Q & A の Q だけになりがちだが、自己開示をすることで、意味のあるインプットにつなげていくことができる。

Let’s make a 3-2 flag.

“Let’s make” は、さまざまな場面で使うことができる表現。「みんなでやろう！」という使い方ができる。今回は、別の時間に、また旗を作ってもよいので、冠詞は the ではなく a を使うこととした。



石毛隆史 (いしげ たかふみ)

東京学芸大学附属大泉小学校教諭。小学校外国語で「どのようにしたら子どもたちに英語力をつけられるのか」について、ゆる〜く研究中。

異文化理解から、文化的調和の理解へ①

外国語学習の大きな目的のひとつは、言語を通じてコミュニケーションを行い、多様な見方や視点への理解を深めることにあります。いま、世界を見渡すと、心が痛むことに多くの地域で紛争がおり、罪のない人々の命が奪われたり、日常が破壊されたりしています。地球温暖化などの世界的な課題は、一国で解決できる問題ではなく、全世界が一丸となって取り組んでいかなくてはなりません。多様な文化・視点をもった人々間のコミュニケーションと相互理解がますます重要になっています。そうした中で、外国語学習の中での「文化理解」にも、新しいアプローチが必要なのではないのでしょうか。

小中学校の英語学習の中での「文化」は、他国の食べ物や風俗・習慣、観光、昔話の紹介などが中心になっています。最近ではインターネットなどから海外の観光情報なども簡単に入手できますし、日本の名産品やユニークなお祭りなどを発信する取り組みを行っている学校もあります。確かに、日本では見かけない外国の食べ物やスポーツなどを知ることはおもしろいですし、言語学習の意欲を高めることにつながるかもしれません。しかし、私たちは文化・国家間の「違い」に注意を向けすぎではないのでしょうか。そもそも「異文化理解」ということば自体が、「違い」にスポットライトを当てている証拠ですね。

多くの国で外国語学習開始年齢が引き下がるのに従い、言語学習の一環としての文化の扱いをどのようにするかについて、大きな関心が寄せられるようになってきました。まず、大前提として心しておきたいのは、子どもたちの文化を理解する能力を過小評価してはいけないという点です。幼児でも、発達年齢にあった形で文化を導入することで、実のある指導を行うことができるといわれています。外国語の授業ではどうしても表面的な外国文化紹介をやっ払いがちですが、本来子どもはもっと深く文化を理解できるということを忘れてはいけません。

しかし、表面的な文化紹介を超えた「文化理解」とはどんなものであり、どのように行ったらよいのでしょうか。まだ具体的な青写真のようなものはないのです

が、ヨーロッパでは、リード（Read, 2022）が三段階モデルというものを提唱しています。まず、第一段階は以下のようなものです。

段 階	年 齢	
第一段階	幼稚園から小学校低学年あたり	当該言語・文化圏での歌、チャンツ、物語、ゲームの中で、子どもたちがすでに母語で親しんでいるものと似ているものをあえて導入することで、他の言語・文化圏に属する子どもたちも、自分たちと同じようなものに親しんでいることを知る。それにより、当該言語・文化への親近感を抱くと同時に、自己肯定感を高めることを目的とする。

この段階のキーポイントは、「共通点」に焦点を当てている点です。文化への理解の出発点は、違いを強調することではなく、同じ人間としての共通点を認識し、互いへの親しみや同情心を深め、尊敬することにあります。そのため、この第一段階は、非常に大切です。いま起きている多くの紛争も、同じ人間として相手を尊重する態度の欠如が大きな要因のひとつになっているからです。

次回では、リードの第二段階、第三段階と、それぞれの段階での注意点をお話したいと思います。

【参考文献】

Read, C. (2022). Creating a model for intercultural competence in early years and primary ELT. In D. Valente & D. Xerri (Eds.), *Innovative practices in early English language education* (pp. 57–79). Palgrave Macmillan.



バトラー後藤裕子

（ばとらー・ごとう・ゆうこ）

ペンシルバニア大学教育学大学院教授、同校 TESOL プログラム・ディレクター。

辞書の三省堂が新中学生へ贈る、新たな学びのパスポート!

三省堂の名入れ辞典

令和7年度改訂の全中学校 英語教科書に対応!

オンライン辞書「ことまな+」付き!



音声も聴ける!

1人1台端末の時代に

辞典を購入すると、オンライン辞書が無料で使える特典付き!(2025年4月1日サービス開始)

紙でも、PC、タブレット、スマホでも同じ内容が引ける!
個人情報の登録不要!

ID設定と辞典クイズに答えるだけで、すぐ使える!

➕ プラス! 和英インデックス ➕ プラス! 辞書活用ガイド



紙でも

デジタルでも

お求めやすい価格の
卒業記念用特製版
をご用意しております。

ジュニアクラウン 中学英和辞典 第15版 特製版
ジュニアクラウン 中学和英辞典 第12版 新装版 特製版

田島伸悟・三省堂編修所[編]
B6判 オールカラー 832ページ
ISBN:978-4-385-10809-4

定価1,300円
(本体1,182円+税10%)

田島伸悟・三省堂編修所[編]
B6判 オールカラー 640ページ
ISBN:978-4-385-10845-2

定価1,300円
(本体1,182円+税10%)

卒業記念サービスの詳細・申込方法はこちら…<https://www.sanseido-publ.co.jp/sotuki.html>



三省堂教科書・教材サイト <https://tb.sanseido.co.jp/>

CROWN Jr. ウェブサイト <https://tb.sanseido-publ.co.jp/e-school/06cj/>

三省堂 〒102-8371 東京都千代田区麹町 5-7-2

※この冊子は、一般社団法人教科書協会が定めた「教科書発行者行動規範」に則って配布しております。